

茨城県那珂郡山方町

山 方 城 跡

御城館跡発掘調査報告書

昭和61年12月

茨城県那珂郡山方町教育委員会

山 方 城 跡

御城館跡発掘調査報告書

序

山方町は、茨城県の北西部に位置し、八溝山地と、男体山地の間を流れる久慈川の中流にあり、地形は山地、段丘、中積低地に区分されます。

山地が70%を占め、特に北部に山地が多く南部に台地と沖積平野があり、山地と平野の境界部に位置しております。

山方町には、御城、館城、龍ヶ谷城等の城跡があるが、中でも御城跡は町の中心部にあり今も土塹、土壘等が残っており、館、根古屋など地名で呼ばれている所もあります。築城、時代等は、はっきりしていないが中世期佐竹家臣山方能登守盛利が築いたと伝えられる。東に久慈川を眼下に収め、阿武隈山系の最南端から関東平野が一望できる高台にあり、その眼望場所として古くから御城の梅林と共に住民に親しまれてきた所であります。

町では、今後の保護保存計画として「リフレッシュふるさと」推進モデル事業により、この御城跡に展望台等の建設と、その周辺整備の計画に伴ない、今回発掘調査を実施したものであります。築城時のものと思われる木杭跡や、当時使用された古銭や土器、及びその破片等が発見されました。貴重な出土品として今後町の資料館に永く保存したいと考えております。この発掘を機に町民の御城に対する意識と关心が更に深まれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査のため御協力を得ました地権者の根本保様、そして調査発掘から、報告書の作成に至るまでご支援をいただきました萩原義照先生をはじめ、この調査にご協力下さいました諸先生方に対し心から感謝申し上げ序といたします。

昭和61年12月1日

山方町教育委員会

教育長 金子良道

例　　言

1. 本書は、山方町御城跡展望台（櫓）建設工事に伴う、発掘調査の報告書である。
2. 調査は、昭和61年7月15日から8月11日まで行った。
3. 調査は、山方町教育委員会が主体となって実施した。
4. 調査は、茨城県埋蔵文化財指導員萩原義照を担当者に、県文化財保護指導委員木村宏を調査員とし、また千葉大2年金子賢一・青森大1年坪井寿郎を補助員として実施した。
5. 調査は、展望台（櫓）建設敷地約400m²に限られたため、トレンチ調査を行い、調査区の拡張は行わなかった。
6. 調査にあたり、山方町企画課・同教育委員会職員の方々に、ご協力を得ましたことに對し、記して謝意を表したい。
7. 調査期間中水戸教育事務所長浅川美昭先生、同人事課長細谷弘一先生・同社会教育課長高瀬宗一先生には、ご来訪下され、ご助言をいただき厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序 文

例 言

○ 山方町航空写真	6
○ 山方町の城館跡位置図	7
○ 山方町の城館跡略測図	8
1 調査に至るまでの経過	9
2 発掘調査要領	11
3 調査の経過	13
4 遺跡の地理的・歴史的環境	17
5 調査の概要	19
(1) 調査区の現況	19
(2) トレンチの設定と調査	20
(3) 遺構	27
(4) 遺物	27
○ むすび	33
○ 図版	34
○ 発掘調査参加協力者名	44

図 目 次

図 1	山方可航空写真	6
図 2	山方の城館跡位置図	7
図 3	御城跡略測図	8
図 4	龍ヶ谷城跡略測図	8
図 5	古館城跡略測図	8
図 6	佐竹氏・上杉氏・山方氏関係略譜	1 8
図 7	城跡の実測図と調査地	1 9
図 8	トレンチ設定図	2 0
図 9	調査区実測図	2 1
図 10	A トレンチ実測図	2 3
図 11	C トレンチ実測図	2 3
図 12	E トレンチ実測図	2 5
図 13	D トレンチ実測図	2 5
図 14	H トレンチ実測図	2 5
図 15	古銭拓影図	2 8
図 16	カワラケ実測図	2 8
図 17	墨書き実測図	2 9
図 18	灰釉陶器実測図	3 0
図 19	土器拓影図	3 1
図 20	石器実測図	3 2

写 真 図 版 目 次

図版 1	高館山全景	34
図版 2	高館山から御城跡を見る	34
図版 3	御城跡南麓根古屋	35
図版 4	龍ヶ谷城跡	35
図版 5	古館山を見る	36
図版 6	一の堀	36
図版 7	二の堀	37
図版 8	三の堀	37
図版 9	龍ヶ谷城の空堀跡	38
図版 10	C・Eトレンチと柱穴	38
図版 11	Eトレンチの柱穴	39
図版 12	Aトレンチ内の土括	39
図版 13	Cトレンチ内のみぞ状落ちこみ	39
図版 14	柱穴と礎石（Hトレンチ）	40
図版 15	土括と柱穴（Hトレンチ）	40
図版 16	遺物の出土（古銭とカワラケ）	41
図版 17	遺物の出土（カワラケ）	41
図版 18	遺物の出土（古銭）	42
図版 19	遺物の出土（Aトレンチ内出土・墨書き石）	42
図版 20	灰釉陶器片	43
図版 21	縄文土器破片	43
図版 22	石 器	43
図版 23	鉄滓と鉄製品	43
○	調査風景（本文中に11枚）	



図1. 山方町航空写真

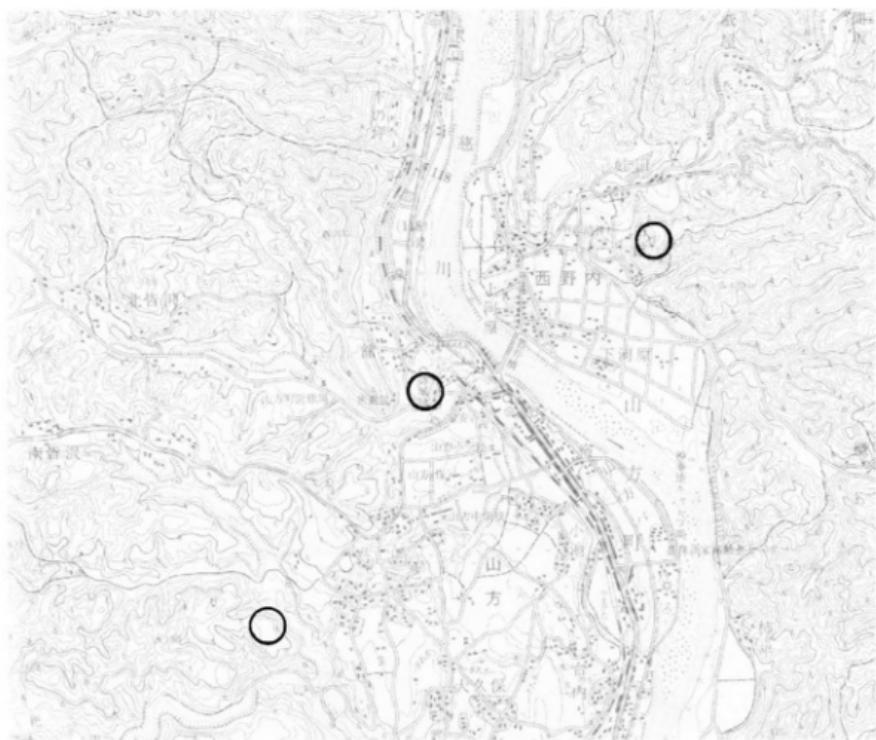


図2. 山方の城館跡位置図 ($\frac{1}{25,000}$)

山方町の城館跡・略測図

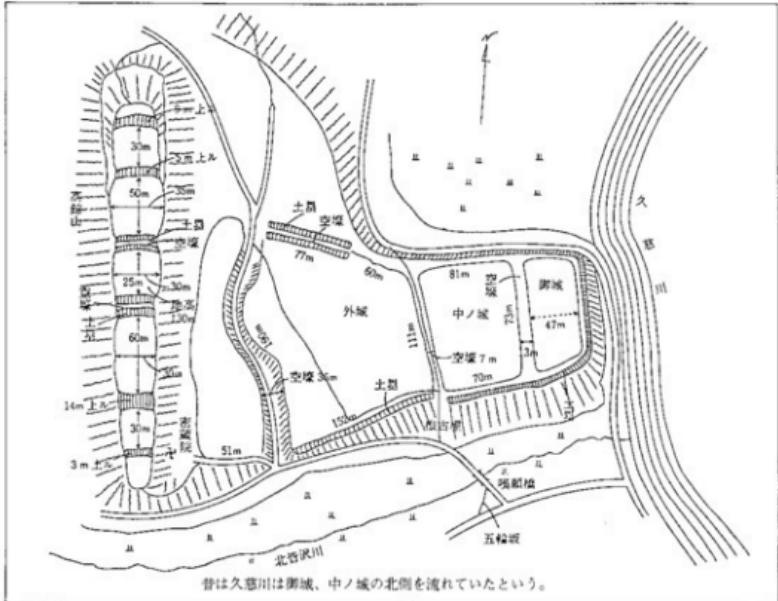


図3. 御城跡略測図（山方町史）

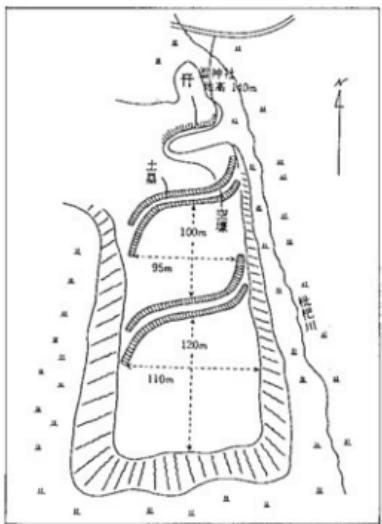


図4. 龍ヶ谷城跡略測図（山方町史）

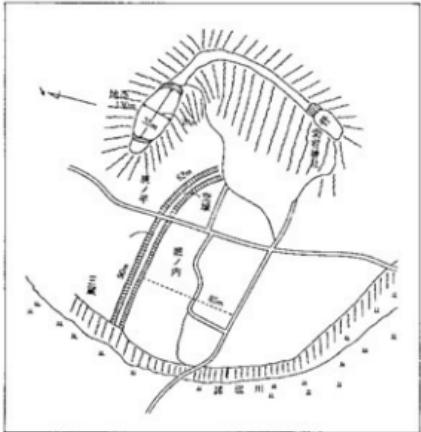


図5. 古館城跡略測図（山方町史）

1 調査に至るまでの経過

○ 山方バイパスの建設と御城跡

山方町は、別に山方宿とも呼ばれ、水戸と奥州棚倉を結ぶ、近世の宿場町として発達した集落で、街道も久慈川に沿ってできたため、大宮・山方・袋田・大子と屈曲の多い道路であったが、次第に道路の整備改良がなされてきた。近年は流通経済の発達に伴って、車輛による大型輸送の急増、その他スピードアップ等に対応するために、バイパスの建設が多くなった。現在山方バイパスの建設工事が進められているが、当初の計画によると、路線の一部は、御城跡内を南北に縱断する、工事計画が町側に提示された。これに対し町教育委員会は、当該地は山方城跡の主郭（一の郭）に位置する御城跡で、茨城県遺跡台帳に登載された、周知の城館跡（遺跡）であるため、文化財保護の立場から、現地調査とその対応について、水戸教育事務所と県文化課へ連絡した。

昭和60年5月17日、水戸教育事務所文化財担当の青木社教主事・同埋文担当萩原指導員が、山方町教育委員会を訪問した。国道118号線山方バイパス建設工事計画の概説をうけ、金子教育長・同坪井社教課長の案内で現地御城跡を訪ねた。山方城跡の範囲とみられる高館山麓から、東方久慈川に突出した舌状台地上の、外城跡・中城跡・御城跡及び三重の空堀跡等を踏査し、山方城跡を概観することができた。計画図によると、御城跡の重要な部分は、切通しによって破壊され、城郭としての意義が全く存しないことになる。山方城跡は、一般に御城（みじょう）と呼ばれ、町民のシンボル的存在の史跡でもある。その規模は、山頂の皆高館、山麓居館跡を結ぶ一大複城郭を構成する。中世城郭の特徴をよく残した遺跡である。

道路の建設も、地域開発の公共的国家的事業でもある。文化財もまた国民的財産であることを認識し、文化財を守る側と、土地を開発する側とは、常に緊密な連絡をとり、両者の調整を図る必要がある。町側（教育委員会）は、文化財の保護保存をはかる、守る側の立場から、バイパス路線の計画変更である。国鉄水郡線隧道（トンネル）が、御城跡地下を貫通して開業したように、バイパスの御城跡内切通し設計を、トンネル設計に計画を変更するよう、関係機関と話し合う必要がある。これに対しては、県文化課においても、バイパス路線の計画変更を要望した。幸い関係部課機関においては、文化財保護の重要性をよく理解されて、ここに山方バイパスの御城跡地下トンネル化が決定した。

○ 二層の展望台（櫓）の建設と御城跡

山方町振興計画「リフレッシュふるさと」推進モデル事業による、文化財保護活用の

施策をみると。

- ・ 町の遺跡を調査整備して、町立史跡公園化をはかる。
- ・ 歴史の里づくりの建設を進める。
- ・ 町内に所在する城館跡の遺構を整備し、城跡復元を考える。

その他自然環境面・歴史的所産面・文化的所産面においても、町民の理解と協力によって積極的に保全管理し特に文化財の整備活用が計画されていることを知り、町長を始めとした町執行部・町議会一丸となった、新しい山方の町づくりの方向に触ることができた。今回山方町で、御城跡を中心とした、史跡公園化の前提ともなる、御城跡の観光開発が企画された。それは中世山城の物見を模した、二層の展望台（展望檻）を、御城跡の突端部、久慈川を眼下にして建設が計画された。またこれに付随して、遊歩道・遊園地等も計画されると思われる。

文化財の保護というと、ただ単に現状維持・現状保存を考えることは大切なことであるが、現代社会の急激な変ぼうに対し、先手を打つ施策、即ち企業開発に先行して、遺跡・史跡等の文化財を、自治体が整備活用を主目的とした、地域観光開発（史跡公園化等）計画は、積極的に文化財を保護保存することになるのではないかと考えられる、山方町の企画した、御城跡内の展望台（展望檻）の建設事業は、観光開発の意味もあるが、城跡の復元にも関連した一大快挙といわなければならない。

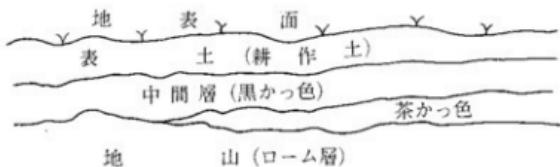
2 発掘調査要項

- (1) 所在地 那珂郡山方町大字山方317番地 外
- (2) 地権者 那珂郡山方町大字山方630番地 根本 保 他
- (3) 面積 5637m² 内400m²
- (4) 立地 御城跡は標高75mを測り、後方高館山(135m)から東方久慈川にのぞんだ、舌状台地上に位置し、中世(戦国時代)山城の特徴をよく残している。
- (5) 実施主体 山方町教育委員会
- (6) 調査期間 昭和61年7月15日～8月11日
- (7) 目的 御城跡内的一部に、町の観光開発による、展望台(展望檜)の土木工事が行われるため、事前に遺跡の性格・範囲等を調査する。
- (8) 準備 測量用具・遺物収納具・記録関係物(カメラ・筆記具等)・発掘用具・その他
- (9) 方法 トレンチ法
- トレンチの設定方法
 - 調査予定地内又は至近に、任意の地点(基準点)を設け、その標高を測定しておく。
 - 地形図(地積図)や計画図等に調査区を設定する。
 - 調査区の規模や障害物等によって、トレンチの位置・方向がかわる場合もあるが、基本的には、図8の通り設定する。
- (10) 調査
- あらかじめ定めた方式によって、単位トレンチを発掘する。
 - 雜草を刈る。
 - 表土を排除する。
 - 原則として人力だが、状況によって、機械力を導入する。
 - 除土面や土壠を観察しながら、地山面まで掘り下げる。
 - ピット(柱穴)の落ちこみ配石・集石・礎石・遺物等の有無や、その種類について確認する。
 - トレンチを拡張する。
 - トレンチ地層ごとに出土遺物をまとめる。
 - トレンチごとに記録をまとめる。

II 遺物の整理

- 荷札を利用し下記事項を、マジックで記入する。
 - ・ 遺跡名（遺跡番号・記号）
 - ・ 出土地区・遺構等
 - ・ 地層・遺構部分等
 - ・ 日付記入等 例 860715
- ポリ袋（ビニール袋）に遺物を入れる。
 - ・ 荷札の記入面が外から見えるように中に入れる。
- 実測図の作成
 - ・ 各トレンチの平面・断面を実測する。
 - ・ 遺跡名・遺構名・縮尺・年月日

○ 土層の例



3 調 査 の 経 過

今回の調査は、城跡全体(御城跡・中城跡・外城跡)の調査でなく、御城跡の一部(400m²)に、町主体による土木工事が計画されているので、その部分のみ発掘し、遺構・遺物等の確認することを主眼に、次のような方法で調査を進めた。

発掘作業の開始は、7月15日から予定したが、梅雨期による雨天の連続で、実際の発掘作業は、8月1日から8月11日までを要した。調査に入りても、途中雨にあって忙しい調査になった。以下日誌によって、発掘調査の概要を述べる。

○ 7月4日 (木) 晴

現地調査と発掘調査について、事前の打合せを、町中央公民館にて開く。

出席者 町側 町長・教育長

企画課長・同補佐

社教課長・同係長

県側 水戸教育事務所

青木社教主事

萩原理文指導員



御 城 跡 内 調 査 区

○ 7月15日 (月) 雨

発掘調査開始

雨天のため町中央公民館にて、調査事項について打合せ。

出席者 教育長・企画課長・社

教課長・企画課長補佐・

社教係長

青木社教主事

萩原調査主任

梅雨期に入っているので、当分作業延期、その間に調査区内の支障物(雜木・雜草)等の除去。



調 査 風 景 (Aトレンチ)

- 7月29日 (火) 晴
- 7月30日 (水) 晴

町教育委員会職員による、調査区内の支障物の除去作業と、調査区の設定。

- ・ 大草刈り・20m×20mの調査区設定・杭打。

- 8月1日 (金) 晴

発掘調査 調査前の打合せ

調査協力 町教委職員

同企画課職員

調査指導 水戸教育事務所

青木社教主事

萩原調査主任

作業員 山方建材人夫4人
作業開始

地形測量とトレンチの設定

- ・標高を移動しレベル測定、調

査区の実測・基準点
 $P_1 \quad 76 \cdot 15$
 $P_2 \quad 77 \cdot 875$

・調査区400m²の南北に2m×20mのトレンチ7本設定。

- ・A～Cトレンチの掘削。

ユンボを導入し、雑木と篠の抜根除去と表土を剥ぐ。

- ・トレンチの堀り下げ除土。

表土が浅く深さ30cmで、ローム面に達した。ピット、土括多数確認。Aトレンチ南端に、長方形の落ち込み2か所確認。



調査風景 (Eトレンチ)



調査風景 (Eトレンチ)



調査風景 (Hトレンチ)

○ 8月2日 (土) 晴

作業開始

- トレンチ作業続行、A・Cトレンチのピットの検出と調査。
- Eトレンチの掘削除土作業、Cトレンチから浅い溝状遺構確認。
- Eトレンチのピット内から古銭2枚出土。
- 東西にHトレンチ 3m×10mを設定掘削開始。
- Gトレンチ 2m×7mを掘削、各トレンチからピット、土括等多數確認。



調査風景 (Dトレンチ実測)

○ 8月3日 (日) 晴

・作業休み

- 調査の中間整理
- 写真撮影

○ 8月4日 (月)

5日 (火)

6日 (水)

・雨天のため作業中止

○ 8月7日 (木) 晴

作業開始

- トレンチ作業続行・トレンチ内の清掃とピットの実測・写真撮影。

○ 8月8日 (金) 晴

作業開始

- Dトレンチ (2m×7m) を



調査風景 (トレンチの実測)



調査風景 (遺物の採集)

掘削、Dトレンチから古銭4枚、カワラケ出土。

- トレンチ内の清掃、土層断面の実測・トレンチ実測。

- 現地説明会

当日午後3時から現地において、発掘の経過・目的・概要等について説明。

参加者 水戸教育事務所長

同 人事課長

同 社教主事

町教育長・社教課長

町社教指導員、町文化

化財審議委員他発掘

関係者。

○ 8月9日 (土) 晴

10日 (日) 晴

作業休み

○ 8月11日 (月) 晴

作業開始

水戸教育事務所高瀬社教課長
同青木社教主事來訪し、終日指導、調査区の整理と平面・断面の実測。

写真撮影、遺物の採集整理

トレンチの埋め戻し、後かたづけ。

調査終了。



調査風景（平板測量）



調査風景（現地説明会）



調査風景（調査員と作業員）

4 遺跡の地理的・歴史的環境

山方町は、八溝山地と男体山地にはさまれた、久慈川流域に発達した地域で、県の北西部に位置する。面積84・31km・人口9,400人・世帯数2,516・昭和22年町制を施行した。南北に縱貫する国鉄水郡線の山方宿駅が、町のほぼ中央に当っている。町の東方は久慈郡水府村と金砂郷村、西方は美和村と緒川村、そして北は久慈郡大子町、南は大宮町にそれぞれ隣接している。

城跡は、山方町大字山方字館地内に選地され、高館山（135m）から東へ、久慈川を眼下に臨んだ舌状台地にあって、台地先端部から西へ御城・中城・外城の呼称が残っている。地域の人びとは、単にこの台地一帯を御城（みじょう）と呼んで、中世城館の所在を、今に語り伝え残しているがそのはじめは、関東の名門鎌倉管領上杉氏の出である、山方氏の居館跡とみられている。

山方氏については、姓氏家系大辞典、新編常陸国誌に、「山方氏、上杉氏の族なり、美濃國山方より出づ、鎌倉管領上杉民部大輔憲顕の子憲利は、助八と称す、後右馬助となる、初めて濃州山方を領す」。また佐竹家譜に、「山方能登守重泰……」とある。

山方氏が常陸山方に来た理由については、山方町史に、「上杉憲利は、はじめ濃州山方を領して山方氏と称した。その子盛利は助八郎能登守といい、鎌倉で高梨氏と争い、これを討ったため追われて、上杉憲定に頼り武藏国久良岐にいた。応永15年（1408）憲定の子義憲が、佐竹義盛の養子となり、佐竹13代をつぐに及んで、その後見役として常陸に下り、山方に入った」と述べている。その他水府資料には、「古館二つあり、一は東中務の居城なる由申伝え字御城という。一つは何人の居城なるや申伝えなし、字龍谷という。佐竹家臣山方能登守篤泰あり、此人の居所ならんか」とある。

管見では、龍ヶ谷はリュウガイと呼ばれている、これはヨウガイ（要害）の転化で、山方城の出城的性格をもつものである。また山方城は、佐竹の支族東政義の居城ではないかもいわれているが、一時期山方に居住し後小里（久慈郡里美村）に移るとあるので、多分久慈川東の「古館」こそ東氏の居城ではなかったかとも思われる。古館山頂に現在アタゴ神社が、まつられてある。城郭としての規模、さほど大きくなはないが、尾根一帯に堀切り帯郭などが配され、郭名フンダテ（古館）と呼ばれている。縄張りの状況からみて、南北朝時代の臨時の砦と思われる。

御城跡を主郭とした、山方城跡の遺構としては、高館山頂に堀切りや土塁・土橋が見られ、その東山麓の台地上には、見事な三重の空堀を残している。久慈川を俯かんする最先端を、御城と呼んでいる。これは近世城郭の本丸に相当するところである。中城は二の丸、

外城は、三の丸にあたる。高館山は戦時の「詰城」で、平城の居館としては、台地上の御城・中城であったろう。また御城の南麓皆沢川に添って、一族幕下の居宅が所在した、地名「根古屋」がある。

現存する山方城跡の規模は、御城跡約4,700m²・中城跡約5,500m²・外城跡約13,600m²で、全面積はおよそ23,800m²である。各郭間は空堀が南北に切り通しになっている。現在空堀は、畠地と道路に利用されている。堀の深さ一の堀（御城と中城跡間）で、現堀底から墨上まで約3m・堀幅11m・二の堀（中城と外城間）で、深さ約5m・堀幅9m・三の堀（外城と高館山麓間）で、深さ10m・堀幅30mが計測された。

本郭の繩張り特色としては、舌状台地上に各郭が、東方久慈川に向って、空堀を境に連鎖して作られた、複郭の城（複城郭）である。更に後方に詰の城としての、高館山頂には空堀・堅堀・土塁土橋を數か所に構築した、戦国時代の代表的な山城である。また高館山から南方約1kmに、標高120mの龍ヶ谷山（リュウガイ山）の要害は出城と考えられる。

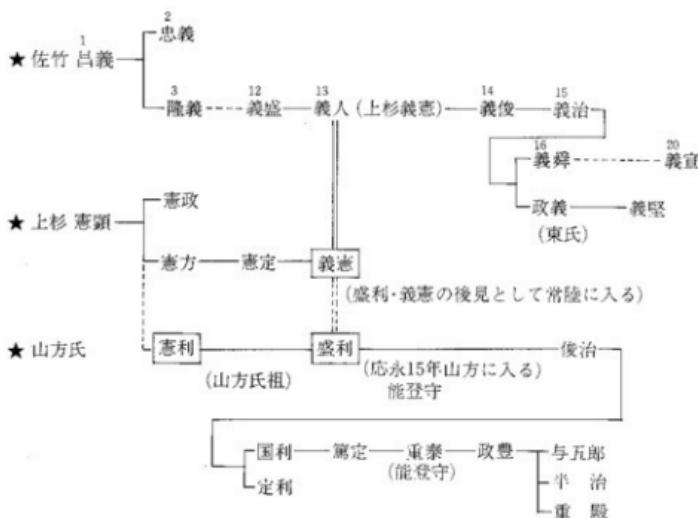


図6. 佐竹氏・上杉氏・山方氏の関係略系譜

5 調査の概要

(1) 調査区の現況

茨城県遺跡台帳に、登載は山方城館跡の部に、那珂郡山方町大字山方字館306番地外所在、名称「御城館跡」とあるが、城館跡の名称とするならば、「山方城跡」とすべきと考えられる。御城とか、館・根古屋・上城・下館・リュウガイ(要害)・堀の内と呼ばれる地名は、全国に多く所在する。これらは、中世城館跡の所在を示す呼称名が、地名となって今に残っているもので、これをもって、城館跡の固有名とすることには問題がある、これを機に名称を山方城跡とすることをすすめたい。

本調査の区域は、久慈川を眼下に俯かんする、御城跡の最先端部で、図に示す400m²の小範囲に限られているので、その範囲内の遺構、遺物を調査することに目的をおいた。



図7. 城跡の実測図と調査地

(2) トレンチの設定と調査

調査地 20m×20m の方形内に、右図に示したトレンチを設定した。最初発掘したトレンチは、A・C・D・E・G の5本だが図にみられるように、C トレンチから、溝状遺構が検出されたので、これに垂直な 3m×10m の H トレンチを新たに設けて、確認調査を進めた。

各トレンチで確認した遺構は、多数のピット（柱穴）と土括である。また縄文時代の遺構とも思われるものもあるが、遺物が出土されないので、性格不明。

遺物は、古銭・カワラケと土器の小破片が出土したにすぎない。

A トレンチでは、ピット39基と

長方形遺構（土括）2基を確認できた。遺物は墨書きの河原石と、柱穴内の石（礎石）が、確認できた。

C トレンチでは、溝状の遺構とピット37基、土括1基が確認された。出土遺物としては、土器破片が少量採集された。

D トレンチ 2m×7m では、21基のピットを確認した。遺物は古銭4枚・カワラケ・土器破片が出土した。

G トレンチ 2m×7m からは、ピット3基のみで、遺物の出土はなかった。

H トレンチは、C トレンチの溝状の落ちこみを、調査するために、C トレンチへ垂直に 3m×10m のトレンチを設けて調査したが、土括状の落ちこみとピット11基確認しただけである。

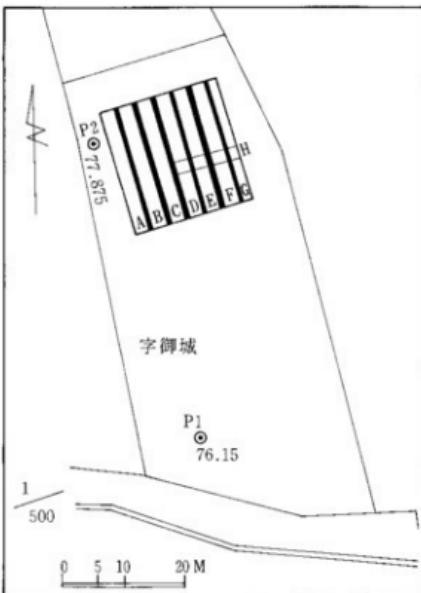


図 8. トレンチ設定図

図9. 調査区実測図

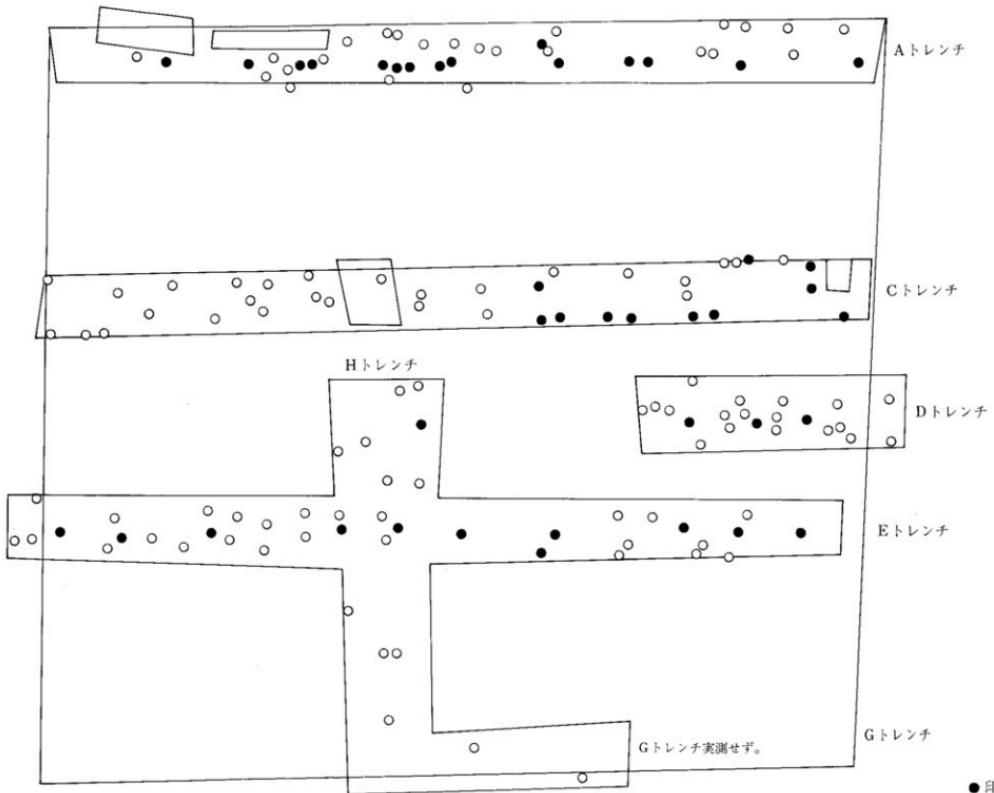


図10. Aトレンチ実測図

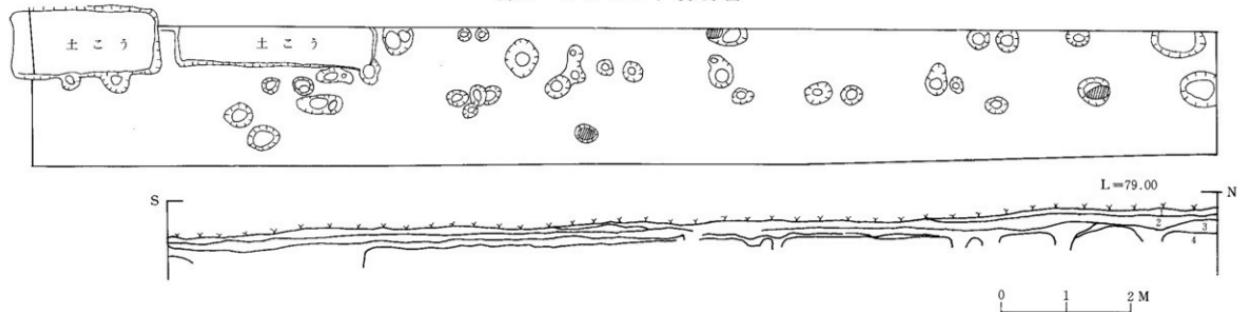


図11. Cトレンチ平面実測図

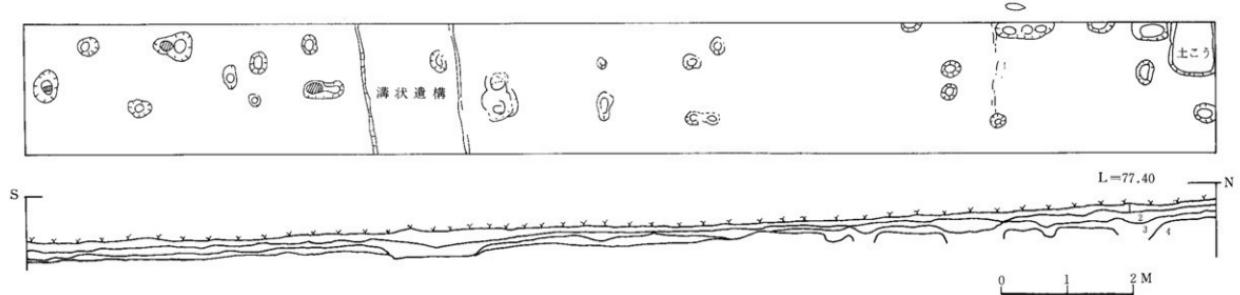


図12. Eトレンチ平面実測図

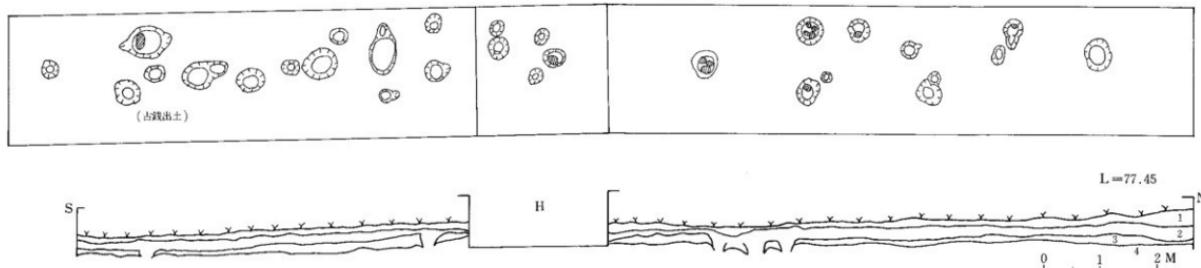


図13. Dトレンチ実測図

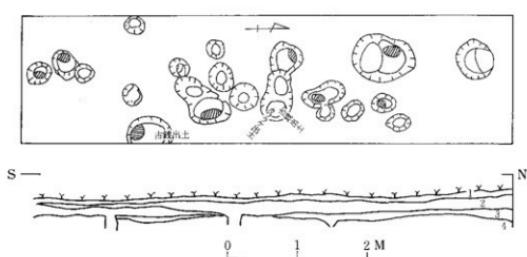
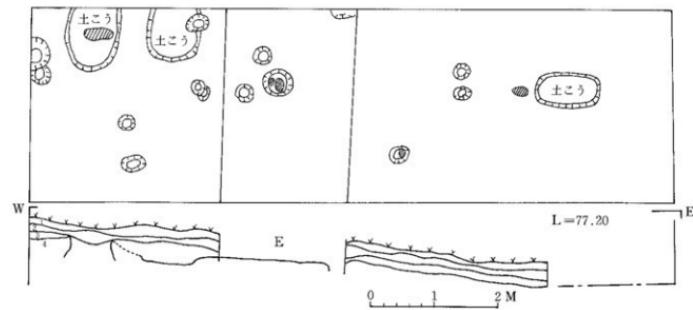


図14. Hトレンチ実測図



(3) 遺構

○ 柱穴群

各トレンチから多数のピットが確認されたが、そのうちどれが建物群のものか、櫛穴であるのか、明確に区別することは出来ない。また柱穴内には、礎石と思われる河原石、岩石物が埋土されてあった。柱穴の配列をみると、同じ間隔で直線上に並んだ柱穴群もあるが、その対応関係をつかむまでには至っていない。これらの柱穴は、調査区外にも、数多く分布されていると思われるが、全体調査をしない限り、柱穴相互の位置関係が複雑で、建物を推定することは出来ない。多分堀建小屋程度の建物が何回も建て替えられたり、補強用の支柱のために、数多い柱穴が所在したと思われる。

○ 方形遺構

Aトレンチ南端西壁下、0.8m×2.5m、ローム面からの深さ0.9mの長方形の、方形遺構が2基、直線上に確認された。中世の土塁とも考えられるが、遺物が採集されないので、その性格は不明である。

○ 土拵

Hトレンチ北壁下に長径1m、短径0.5m、ローム面からの深さ0.9mが計測された。埋土遺物としては、縄文土器片が採集された。

○ 溝状遺構

Cトレンチの中ほどから1.2m立上り0.2mの浅い溝状が確認されたが、性格不明。

(4) 遺物

出土した遺物は、城館時代のものに、古銭6枚・カワラケ2点とその小破片・鉄津（金クソ）2点・鉄釘2点・特筆すべきは、守護祈願と思われる墨書の河原石1点が発見された。また城館以前の遺物としては、縄文土器の小破片14点と、剥片の小石器7点のみである。

○ 城館出土の遺物

(7) 古銭

今回出土した古銭は、次図に示したように錢貨6枚である。このうち中国元時代の至大通宝1枚・明の洪武通宝1枚・不明通宝1枚・私鑄錢2枚・破片1枚の計6枚である。

出土古銭一覧表

	錢貨名	鑄造年	西暦	直徑	備考
1	至大通宝	至大元年	1308	2×3 cm	中国元時代（武宗帝）
2	洪武通宝	洪武元年	1368	2×3 cm	中国明時代（明太祖）
3	□祐通宝			2.4 cm	
4	不 明				私 鑄 錢
5	不 明				私 鑄 錢
6	不 明				私 鑄 錢

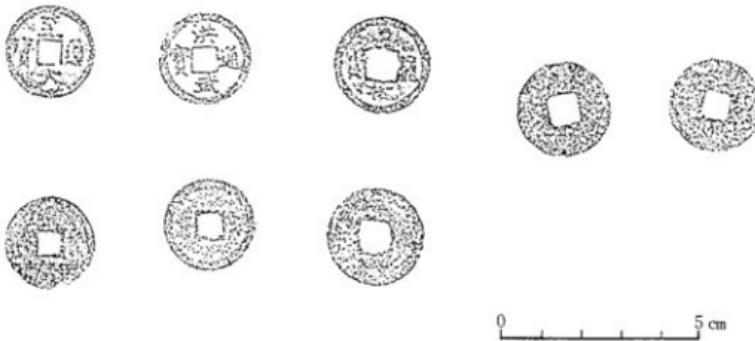


図15. 古銭拓影

(イ) 土器

出土したカワラケは、Dトレンチから、壺型2点のみである。

その他出土した土器は小破片で、器形不明である。

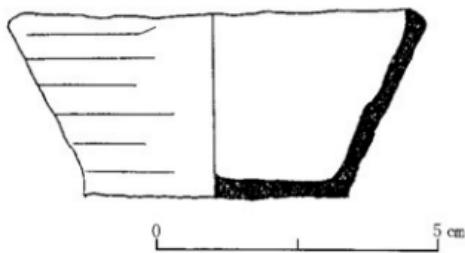


図16. カワラケ実測図

(4) 墨書石

Aトレーナー内から出土したもので、これは中世の民間信仰にみられる、一字一石経に類する、祈願石・祈祷石(仮称)と思われるが、墨書の文字をよく判解読することが出来ない。

一面は、壬申□円・辰星七難即□とあり、他面は守護□□と読まる。多分戦国時代の将兵等が、武運を祈願した密経系の祈祷と関係するものであろう。壬申の年代が問題になるが、山方氏の常陸入国は、応永15年(1408)、といわれるから、その後の壬申の年は永正4年(1512)と元亀2年(1572)にあたる。とにかく戦国時代に書かれたものであることは間違いない。辰星とあるから、辰年生れの者が、七難即滅と守護安全を、祈願・祈祷したと解釈されるが今ここで断言することは出来ない。



図17. 墨書石実測図

(エ) 鉄滓と鉄製品

角釘とみられる鉄製品2点と、
鉄滓（カナクソ）の小さいかたま
り2点出土した。この台地上のど
こかに、鍛冶場が在存したと思わ
れるが、今回の発掘は、小範囲の
ため、鍛冶場の遺構を確認するこ
とはできない。

(オ) 陶 器

灰釉陶器片一個出土した。
出土した陶片は、底部を半分残し
た黄瀬戸の小皿で、その特徴手法
である、梅の印花文（押し型）が
見られる。花文には菊・梅・桜・
かたばみなどの意匠化されたもの
が多い。作陶は桃山時代のものと
思われるが、山方城跡の時代推定
の一資料として貴重な出土品であ
る。

○ 城館以外の出土品

今回の調査で出土した、縄文土器はすべて小破片で、住居跡等の遺構に伴ったものでは
ない。石器は、先土器時代の石器片が採集された。その材質は、町内諸沢・北富田産のも
のである。

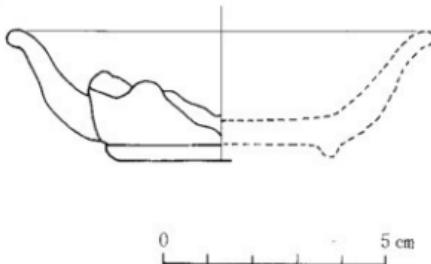


図18. 灰釉陶器実測図

図・写真番号	器種	石材	最大長	最大巾	最大厚	備考
1	刀器	メノウ	5.9cm	3.9cm	1.8cm	諸沢・北富田
2	石核	メノウ	5.2	3.5	1.7	タ
3	刀器	メノウ	4.5	4.0	1.5	タ
4	石核	チャート	6.0	4.2	1.8	野上産
5	削器	チャート	4.2	2.5	0.8	タ
6	石核	チャート	3.4	3.8	1.7	タ

石器観察表

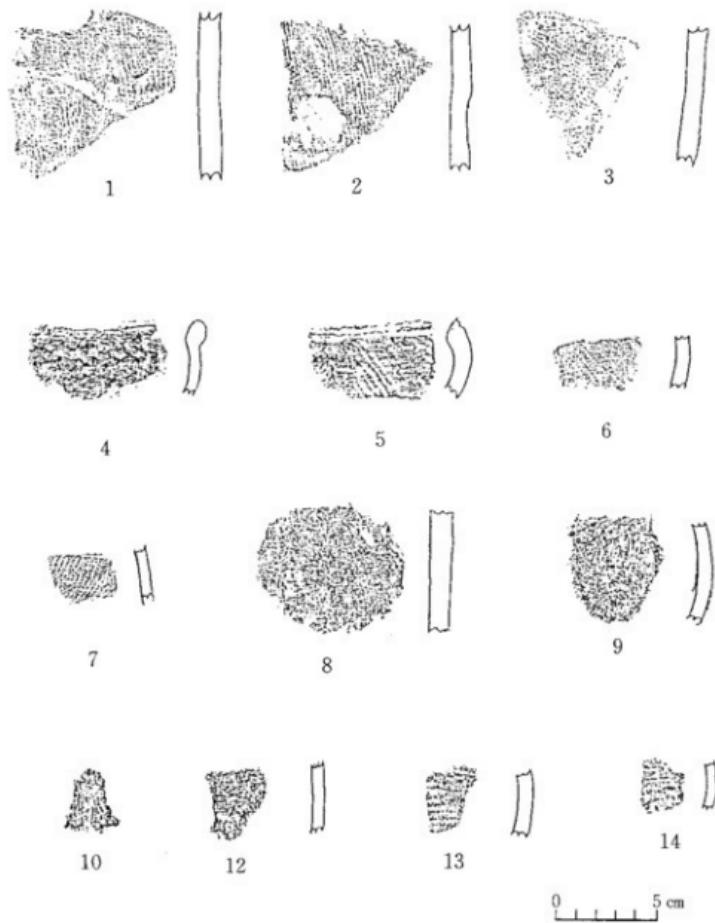
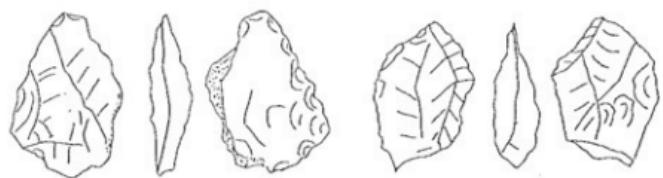
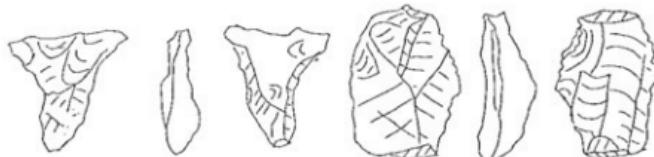


図19. 土器拓影図



1

2



3

4



5

6



図20. 石器 実測図

む　　す　　び

山方町において、観光開発を兼ねた、いわゆる山方城物見櫓復元とも考えられる、御城跡内展望台（櫓）建設工事に伴う発掘調査は、以上述べてきた内容である。調査期間や調査面積など、限られた条件の中では、遺跡の範囲及び性格等について、充分調査することはできなかった。しかし、多数の柱穴群が検出確認されたことは、本城跡の建物の性格構造を知る資料と考えられる。その他古銭の出土によても、本城跡の時代推定のうえで貴重な遺物である。また他に類例をみない、将兵の災難除去を祈願したと思われる、墨書きの出土は、今後の研究にまたなければならない。

今回の調査にあたっては、金子教育長をはじめ、山方町教育委員会から、多くの御援助を賜わり、特に事前の準備、作業員の手配、調査事務などに、終始格別の御配慮を戴いた坪井社教課長、同会沢係長に厚く御礼を申したい。また展望台（櫓）建設の資料、報告書執筆に際し資料を提示された石川企画課長、同鈴木課長補佐の好意に感謝申し上げたい。

おわりに、水戸教育事務所社教主事青木邦久先生には、調査期間中度々御来訪下され、調査に心よく参加され、種々御指導を賜わり、その他地元作業員の熱心な態度に対し、ここに明記して謝意としたい。

○ 参考文献

- 新編常陸国誌
- 姓氏家系大辞典
- 日本地名辞書
- 山方町史
- 真壁城跡調査報告書



1. 高館山（南側より）



2. 高館山から御城跡を見る



3. 御城跡南麓根古屋



4. 龍ヶ谷城跡



5. 古館山を見る



6. 一の堀



7. 二 の 堀



8. 三 の 堀



9. 龍ヶ谷城の空堀跡



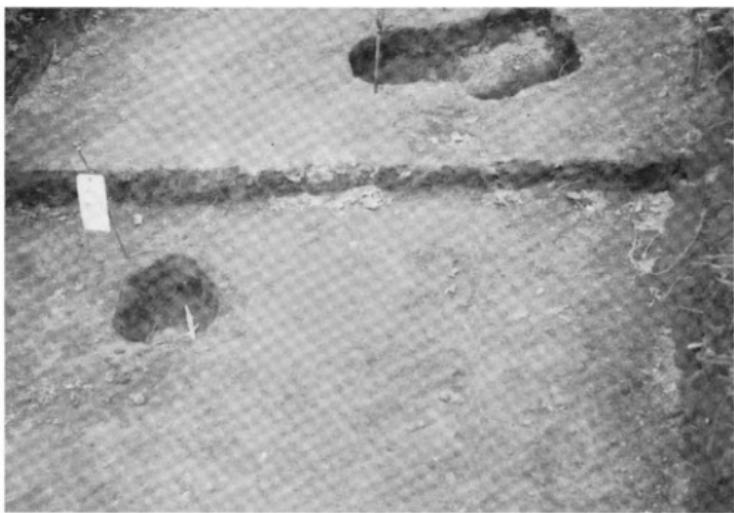
10. C・E トレンチと柱穴



11. Eトレーニチ内の柱穴



12. Aトレーニチ内の土抜



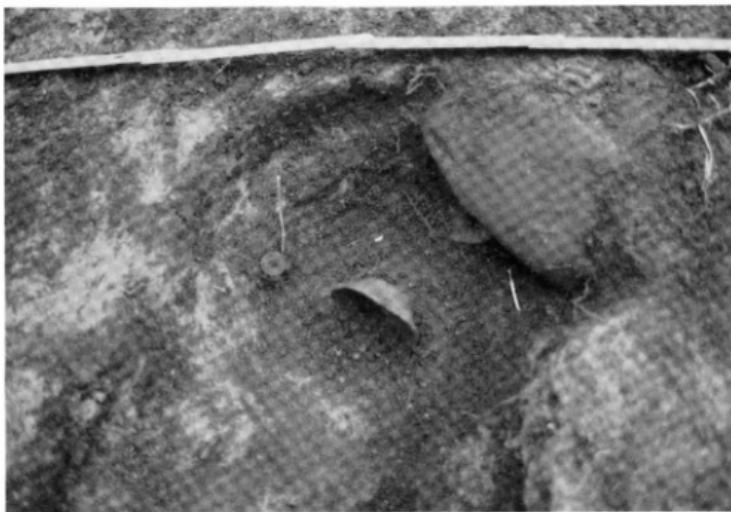
13. Cトレーニチ内のみぞ状落ちこみ



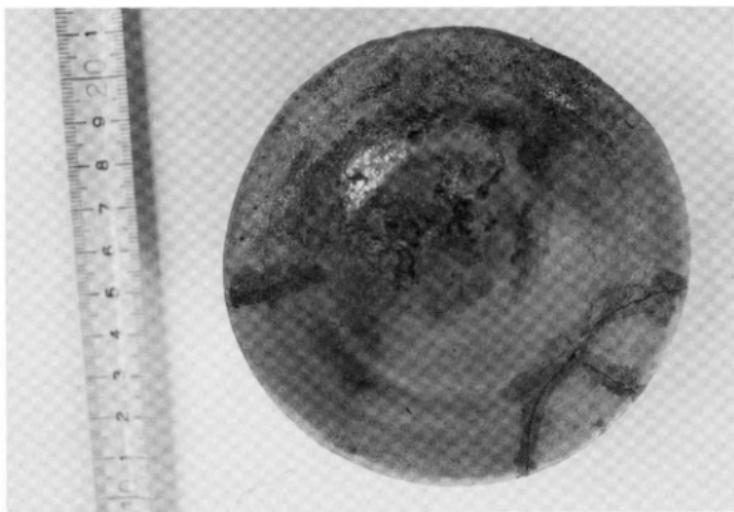
14. 柱穴と礎石 (Hトレンチ)



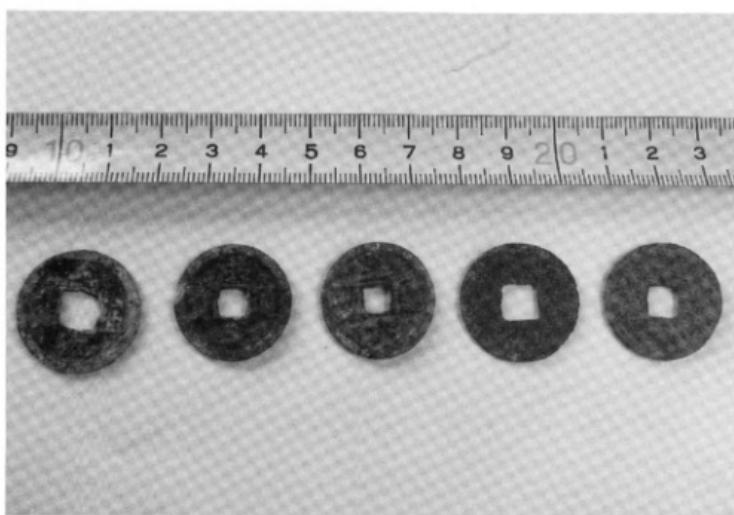
15. 土塹と柱穴 (Hトレンチ)



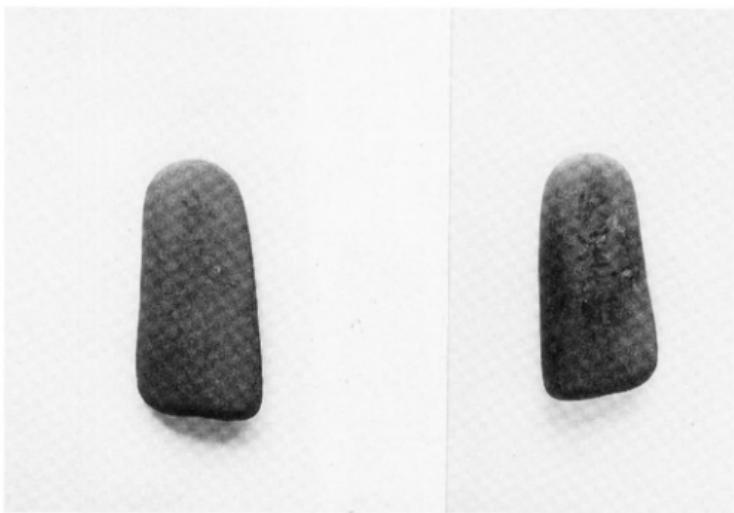
16. 遺物の出土（古銭とカワラケ）



17. 遺物の出土（カワラケ）



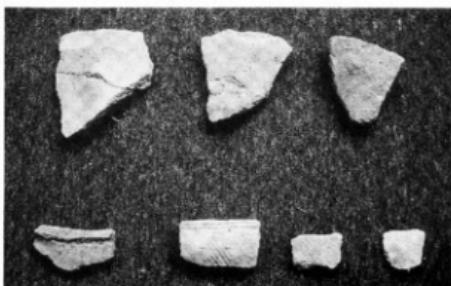
18. 遺物の出土（古銭）



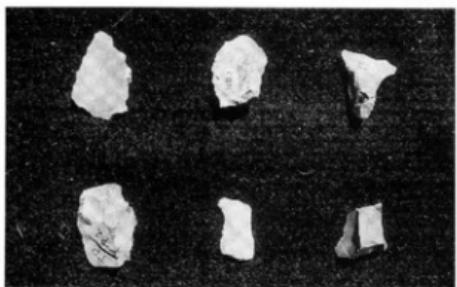
19. 遺物の出土（墨書き石）



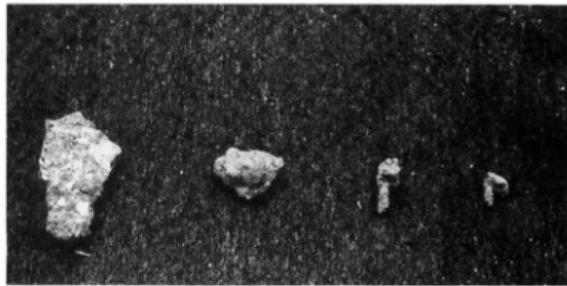
20. 灰釉陶器片



21. 繩文土器破片



22. 石器



23. 鉄滓と鉄製品

発掘調査団及び作業従事者名簿

	氏 名	役 職 名
團 長	金子 良道	山方町教育委員会教育長
調査主任	萩原 義照	茨城県埋蔵文化財指導員
調査員	木村 宏	県文化財保護指導委員
補助員	坪井 克	山方町教育委員会社会教育課長
タ	会沢 薫	同 係長
タ	鈴木 輝男	山方町企画課長補佐
タ	海老根 一雄	同 係長

発掘調査作業従事者

調査主任 萩原 義照

調査協力員 木村 宏, 青木 邦久

作業従事者 藤来 煽男, 真田 武, 木村 賢明

金子 祝男, 三次 力, 安国 友

菊地 一男, 関崎 みつ, 菊地 順子

金子 賢一, 坪井 寿郎, 坪井 研二

事務局 坪井 克, 鈴木 輝男, 会沢 薫

木村 剛雄, 海老根 一雄, 小口 照二

上野 義幸, 木村 雅之, 木村 安文

国松 章

協力者 山方建材株式会社

茨城県那珂郡山方町
山 方 城 跡
御城館跡発掘調査報告書

昭和61年12月10日印刷

昭和61年12月31日発行

発行 那珂郡山方町教育委員会

印刷 梶 夕 ナ 力